<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>原題</td>
<td>古学派の「中庸章句」における「鬼神論」批判について</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>趙 熠瑋</td>
</tr>
<tr>
<td>掲載誌</td>
<td>研究論集 14-1, 37(右)-53(右)</td>
</tr>
<tr>
<td>号期</td>
<td>2014-12-20</td>
</tr>
<tr>
<td>評価</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>担当者</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>备考</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

**URL:** [http://hdl.handle.net/2115/57701](http://hdl.handle.net/2115/57701)
古学派の「中庸章句」における「鬼神論」批判について

趙 煤 瑋

はじめに

「中庸」は本来「禮記」の一編であったが、南末の朱熹が「禮記」から「中庸」を抽出して、「論語」や「孟子」を略称して「四書章句集注」で、朱子学的解釈を施したのち、「四書」を発表した。「四書」の定義には、朱子の「四書章句集注」が「中庸章句」を抽出して、「論語」や「孟子」を略称して「四書」と定義している。「四書」をめぐって、朱子学的解釈を施したのは、伊藤仁齋、中嶋明の「中庸義解」、荒井雄藤の「中庸解」を比較しながら、古学派の「鬼神論」を中心に、それぞれの異同点を検証した。

要旨

「中庸」は本来「禮記」の一編であったが、南末の朱熹が「禮記」から「中庸」を抽出して、「論語」や「孟子」を略称して「四書章句集注」である。朱子の「四書章句集注」は宋代以降の四書注解書の中でも最も権威のあるものとしている。古学派の朱熹と程颐は基本的に儒書本来の意味を追求する立場から注解を施し、朱子学を批判しているが、四書の中には、「中庸」の解釈が特徴的に鬼神に関する解釈にかかわる相違が見られる。本稿では、朱熹「中庸章句」、伊藤仁齋「中庸義解」、荒井雄藤「中庸解」を比較しながら、古学派の「鬼神論」を中心に、それぞれの異同点を検証した。
一、朱子の鬼神論

仁義と道教の注解は朱子の注を踏まえて施したものである。まず、四書の注解においてはかななりの相違が見られる。今後は、『中庸』に於て『鬼神』解読を中心に古学派の『中庸』解読の異同点を検討してみたい。

當に聖經、鬼神を説く本意を以て一項と作りて論べし。又た

常に聖經、鬼神を説く本意を以て一項と作りて論べし。又た

常に聖經、鬼神を説く本意を以て一項と作りて論べし。又た

常に聖經、鬼神を説く本意を以て一項と作りて論べし。又た
北海道大学文学研究科
研究論集
第十四号

問「便是陰陽去來。」

曰「固是也。」

右内容から見れば、朱子が陰陽二気として「鬼神」を捉えることには明らかであろう。一篇に示す視点から見れば、陰陽二気の伸びることによって萬物が生まれる。屈することによって物がなくなる。周知のようになる。朱子は「理気二元論的」言語世界観を提倡し、鬼神、二気の良能、是現往来届に照らし、陰陽二気の會合と離散によって観されているので、鬼神の理解は、朱子の理解であり、人業的な操作ではない。朱子の理解では、鬼神は「理」に従って動いている。

右によれば、鬼神とは陰陽二気の往来屈伸のことであり、朱子の解釈によると、鬼神に形と声無し。然れども物の終始、陰陽合散の為に非ざるを知り。是れ其の物を為すの體にして、物の能しかざる所を聞くことができる。次に、物を観して遣す可らずにて、次のように述べている。

朱子は更に經文に見る「之を観て見、之を聴ども聞ざる鬼神形と声無し。然れども物の終始、陰陽合散の為に非ざるを知り。是れ其の物を為すの體にして、物の能しかざる所を聞くことができる。次に、物を観して遣す可らずにて、次のように述べている。

朱子は更に經文に見える鬼神形と声無し。然れども物の終始、陰陽合散の為に非ざるを知り。是れ其の物を為すの體にして、物の能しかざる所を聞くことができる。次に、物を観して遣す可らずにて、次のように述べている。

能使人畏敬奉承、而發見昭著如此、乃其体物而不可遺之驗也。朱子は更に經文に見える鬼神形と声無し。然れども物の終始、陰陽合散の為に非ざるを知り。是れ其の物を為すの體にして、物の能しかざる所を聞くことができる。次に、物を観して遣す可らずにて、次のように述べている。

朱子は更に經文に見える鬼神形と声無し。然れども物の終始、陰陽合散の為に非ざるを知り。是れ其の物を為すの體にして、物の能しかざる所を聞くことができる。次に、物を観して遣す可らずにて、次のように述べている。

誠なる者は、真僞無妄の謂ひなり。陰陽合散、實なる者に非ざる無し。故に其の發見の為せられること、此くの如し。如是。
朱子のこの言葉を理解するために、「朱子語類」と見える次のような問合せを取り挙げてみよう。

この語は如何。曰く、「誠は即是実然の理、鬼神も亦たら為れ実然なり。若し

前軒「鬼神」、一言以蔽之、曰「誠而巳」。此語如何。

由来の徳為者、誠なり。徳は只だ唯鬼神に就きて言ふ。其の使状

的説は「鬼神」の存在を可とし、鬼神

の徳は、誠なり。徳は只だ唯鬼神に就きて言ふ。其の使状

は即是実然の理、之を誠にする者は、人の道なり。誠なる者は勉強して中名、思は

善を挙げて固く之を執る者なり、於いて次のようにして述べている。誠

なる者は、真実無妄の謂にして、天地の本然なり、之を誠にする者は、不

従理にある、未だ能く真実無妄ならざる、其の真在在異の欲を欲

するの謂ひなり、人事の業に於て居らざる、聖人之死、渾然天

理にして、則ち亦天の道なり。未だ聖に至らざれば、則ち人欲の

私を無く能はずして、其の徳を為すも能く皆無せず。故に

未だ思はずして得る能はず。「集注」

誠者、真質無妄之謂、天地之本然也。誠之者、未能真質無妄、

能無人欲之私、退其為德不能皆貫。故未能不思而得。

朱子の解詁に據れば、「誠」とは真質無妄のことをあって、天地の

本來の姿である。まですよ人の領域に至らない人は人欲を完全になしそ

余りな反復することでを得られないので、徳を完全な真質の状態、つまり、「現実」を為

して聖人の領域（即ち天理）に近づく努力をする必要がある。つま

り、朱子の理解している「誠」は「天理」のことである。
二、伊藤仁齋の鬼神論

伊藤仁齋の『中庸發揮』（續由）では、次のよう
に述べている。

朱考亭氏に至っては、「論語」を「中庸」に
て、「大學」を合して列べて「四書」を
とす。中略）然れども「大學」は本より孔門の
書に非ず。

伊藤仁齋は、『中庸発揮』（續由）では、『中庸』について、次のよう
に述べている。

朱考亭氏に至っては、「論語」を「中庸」に
て、「大學」を合して列べて「四書」を
とす。中略）然れども「大學」は本より孔門の
書に非ず。

伊藤仁齋は、『中庸発揮』（續由）では、『中庸』について、次のよう
に述べている。

朱考亭氏に至っては、「論語」を「中庸」に
て、「大學」を合して列べて「四書」を
とす。中略）然れども「大學」は本より孔門の
書に非ず。
仁学者の朱子のように、「中庸」全篇を二十六章に分けてはない。「中庸」の箇所では、仁学者は「下篇」の第一篇を論ずる朱子の「中庸章句」の第十六篇を仁学者は「下篇」の第一篇としている。仁学者の注解を確認してみよう。

仁学者は朱子のように、「中庸」全篇を三十三章に分けていない。「中庸」の箇所では、仁学者は「下篇」という三の部分に分けている。「鬼神」を論ずる朱子の「中庸章句」の第二十六篇を仁学者は「下篇」の第一篇としている。中庸の章句には、仁学者の注解が残っている。仁学者の注解を確認してみよう。
三、荻生徂徠の鬼神論

朱子が『四書学』を重んじたのに対し、徂徠は『六経』を『四書』より重視している。『六経』の解読を徂徠は『四書』の解説で最も重要なものであるとする。

六経の補完（論語義）と認識しているので、論語は四書の中では最も重要な経典である。徂徠は論語を中心に四書の解説を重視し、徂徠は徳行の名も改め御天倫の本然と云う。

三、荻生徂徠の鬼神論

朱子が『四書学』を重んじたのに対し、徂徠は『六経』を『四書』より重視している。『六経』の解読を徂徠は『四書』の解説で最も重要なものであるとする。朱子の解説で最も重要な部分である。

徂徠は徳行の名も改める。徳行名も論語義を重視し、朱子学と異なり、徳行名を孔門の道授命法であると考えている。徳行名の言葉のみならず、徂徠は文字を次のように述べている。

徂徠は徳行名も改め御天倫の本然と云う。朱子が『四書学』を重んじたのに対し、徂徠は『六経』を『四書』より重視している。徳行名も改め御天倫の本然と云う。
人物活動を通じて、人々は実在的な物である「禮」を体験するという。

『鬼神』は、「鬼神」を離れて所謂物を離れ、廻りの道を開く鬼神を離れて、世家の私物をそれぞれに示す。これは礼のうち、『禮物』を離れて禮物を離れて、世家の私物をそれぞれに示す。

『禮物』は、人家の私物を離れて禮物を離れて、世家の私物をそれぞれに示す。

第十五章

『禮物』の機能、禮物の禮物も、鬼神と不関係である。然ル鬼神を離れて所謂物を離れ、廻りの道を開く鬼神を離れて、世家の私物をそれぞれに示す。これは礼のうち、『禮物』を離れて禮物を離れて、世家の私物をそれぞれに示す。

『禮物』は、人家の私物を離れて禮物を離れて、世家の私物をそれぞれに示す。

第十五章

『禮物』の機能、禮物の禮物も、鬼神と不関係である。然ル鬼神を離れて所謂物を離れ、廻りの道を開く鬼神を離れて、世家の私物をそれぞれに示す。これは礼のうち、『禮物』を離れて禮物を離れて、世家の私物をそれぞれに示す。

第十五章
鬼神なる者は、先王、これを立つ。先王の道、これを天に本づく。天道を奉じてこれを行ふ。其の祖考を祀り、これを天に合す。道の由て出るのなら。故に曰く、「鬼神と合する。」

鬼神なる者は、先王、これを立つ。先王の道、これを天に本づく。天道を奉じてこれを行ふ。其の祖考を祀り、これを天に合す。道の由て出るのなら。故に曰く、「鬼神と合する。」

鬼神なる者は、先王、これを立つ。先王の道、これを天に本づく。天道を奉じてこれを行ふ。其の祖考を祀り、これを天に合す。道の由て出るのなら。故に曰く、「鬼神と合する。」
徂徠の「辨名」 天命帝鬼神經でも次のようによく述べている。

鬼神の名は、「中庸」は「誠」を以てこれを言ふる。其の言は然るに唯、其の義は一なり。皆其の思慮勉強之心を語るなり。「辨名」 天命帝鬼神經

「鬼神之德」 「中庸」以誠言之、「左傳」以聰明正言之。其言雖殊其義亦皆謂其無思慮勉強之心也。

中庸解と照合してみると、徂徠の言の「誠」は更に明瞭である。従徠の政治理念と深く関わっている。上に立つ人は教化をもって社会風俗を養い、民は風俗によって教化される。中庸解では次のように述べている。

蓋凡人、先王の道を行ひて、能く誠心有る者は、これを天性に得。故に曰く、誠なる者は天道なり。力行の久して、習天性に成。故日誠者天道也。力行之久、習以成性。則其初無誠心者、今皆有誠心。是人也、力之所爲。教之所至。故日誠者天道也。」

本稿は朱熹の「四書章句集注」 中庸章句に、伊藤仁斎『中庸解說』に於ける「鬼神論」 に於ける「鬼神」 について、詳細に考察した。朱熹の解説に於て、鬼神は陰陽二元の為とし、至誠の理を反映している。朱熹は鬼神論を理学論や道徳論と緊密に結びつけて、「誠心」 に於て、中庸の道を身につけることができるとし、

おわりに
伊藤一賢の四書注解書には『論語』『孟子』『大學』『中庸』が収められている。『論語』『孟子』『大學』は儒家の代表的作品で、『中庸』は儒家の哲学思想の一部である。これら四書は、儒家の社会観念とその思想を大きく反映しており、現代の中国社会に大きな影響を及ぼしている。

『論語』は孔子の言語を集めたもので、孔子の教育思想と理論を示しており、特に仁の思想に焦点を当てている。孔子の思想は、社会の安定と秩序を重視し、仁の思想に基づく道徳教育を強調している。

『孟子』は孟子の思想をとらえたもので、孔子の思想を更に発展させている。孟子は孔子の思想を改造し、特に仁義礼智の四端を強調し、これらの基本的な倫理を形成している。

『大學』は大学の教育を指導するもので、大学の教育目標と方法を示している。大学は、学問を追求し、社会のために貢献することを目的としている。

『中庸』は孔子の思想を中庸の原則に符合させたもので、孔子の思想を更に深化し、中庸の原則を応用している。中庸の原則は、適切でバランスのとれた姿勢を取ることであり、孔子の思想を更に深化し、中庸の原則を応用している。